子どもが変わる「教師の言葉遣い」

よい例・悪い例

―やっぱり人間関係――言葉は生きている―

中嶋　洋一

（富山県砺波市表町＝出町中学校教務主任）

一　ムカツクのはなぜ？

「ムカツクんだよっ、てめえはよっ！」

「何を？誰に向かって言ってるんだっ!?」

A男が机を蹴飛ばして教室を出ていく。テレビ番組の一シーンではない。どの学校でも起こりうることである。

人間は感情の動物である。ことばはその感情を刺激する。一言が人をやる気にさせ、一言が心をずたずたにする。

ここにご紹介するのは、子どもたちの心をずたずたにしたことば、心の琴線に触れたことばである。

どんなことを言われた時、いやになりましたか。また腹が立ちましたか？

●決めつけられたり、疑われたりした時。

・おい、ちゃんと掃除しているのか？（見もしないで教室に入ってくるなり、言う）

・おまえはいつもそうだ。

・最近の女子高校生みたいにして、あんたたちバカじゃないの？

●頭からどなりつけられた時。

・（部活動で）帰れっ。とっとと消えろ！やる気がないなら去れ！（そのくせ、帰ろうとすると「なめるなっ！」と怒る。）

●失敗を自分の責任にされた時。

・おまえがしっかりしていないからだ。

●濡れ衣を着せられた時。

・あなたが近くにいたのは、わかっているんです。正直に言いなさい。

●教師が自分の失敗を認めようとしない時。

・そんなこと言ってませんっ。だいたい、あなたは、教師に向かって何ですか？

●前のことを持ち出された時。

・そういえば、前に～したことがあったな。

どんなことを言われた時、うれしかったですか。またやる気が出ましたか？

○自分がやったことを認めてくれた時。ご苦労様、助かったよ。ありがとう。

○自分のことをわかってくれた時。

・それ、君に向いているかもしれないね。

○進歩や上達を認めてくれた時。

・できたじゃないか！（うまくなったなあ）

・よく頑張ったな！（がんばってるね）

○教師と子どもという垣根をとって、人間関係を作ろうとしてくれる時。

・困ったことがあったら、何でも遠慮なく相談しなさい。

二　教師は教室の王様か？

「もっと他にもあったんですが……。こうしてみると、腹が立ったり傷ついたりすることばの方が多いみたいですね。」

アンケートを頼んだH子が、クスッと笑った。

私たち教師は、教室では大人が一人ということもあって、まるで裸の王様のように傍若無人に振る舞っているようである。子どもの人権よりも、自分の感情を優先して授業を行っているかもしれない。

反省したいものだ。

さて、アンケートを分析してみると、彼らは自分を大切にしてくれるか否かで、教師を判断しているようだ。彼らも教師とよい人間関係を作りたいと願っている。しかし、それを可能にするかどうかは、教師の姿勢とことばかけ次第だと言えそうだ。

そこで、今度は教師を観察してみることにする。どうも、教師には、次の二つのタイプがあるようだ。

まず子どもから学ぼうとするタイプ。

彼らは子どもを実によく観察している。子どもの一挙一動に感動する。表情豊かに誉める、心から叱る。だからクラスが明るい。子どもたちとの間に明るい人間関係ができているから、笑い声が絶えない。

一方、「子どもはまだ未完成。」という立場を取りがちな教師。つい悪いことや失敗に目がいきがちになる。ゴミや私語が気になる。子どもの心はだんだん離れていく。教師はまた厳しくする。悪循環だ。

今、私が大切にしていることが二つある。

一つは心のゆとりを持つことである。遊び心を持って子どもに接するようにしている。心に余裕があると笑いが生まれてくる。笑いの中では、子どもたちが心を開いてくれる。

もう一つは、基本的な指導は断固として徹底することである。

ここ数年、「支援」ということばがあちこちで聞かれる。しかし、子どもたちのやりたいことを優先させて、指導を控えて傍観しているような授業をよく見掛ける。これではいけない。

計画があって指導がある。指導があるから評価ができる。指導をしないということは、ビジョンがないということになる。できないことをできるようにするには、具体的な指導が大切。時には強制も必要だ。

この二つことを効果的にするために、相手の立場に立ったことばかけを、私は配慮している。ことばは潤滑油になるからだ。

三　プロ修行は三者のバランスをとること

ことばの使い方は確かに難しい。しかし教師はしゃべる職業だ。プロである。プロは修行が必要だ。

そこで、三者になる修行をする。三者とは、学者、役者、医者である。

学者は、学問の楽しさの本質をよく知っている。教師が学者のように真摯に学ぼうとすれば、子どもたちは教科の楽しさをわかってくれるだろう。何よりも、学者はものを書くときに、ことばをよく吟味する。

役者はエンターティナーである。教師が役者に徹すれば、授業を舞台公演と考え、演出や企画（計画）を入念に考えるだろう。表情豊かに授業をするだろう。すると、ますます教師は子どもが見えるようになり、授業が楽しくなるに違いない。何よりも、役者はセリフ（ことば）を大切にする。

医者は実態をよく知ろうとする。医者のように、「病は気から」と、カウンセリングマインドで受容し、つまずきに対し適切な対応ができるようになりたい。何よりも医者は患者へのことばかけを配慮する。

教師が、この三者の役目をバランスよく演じるとき、教室はきっと心地よい学びの場に変身するだろう。そこでは、笑いがあふれ、ことばが大切にされ、互いの違いや良さが大切にされるだろう。

四　やっぱり行き着くところは人間関係

こうして、自信がついた子どもたちは、自分を大切にするようになる。自尊心が生まれれば、相手のことにも気づけるようになる。信頼関係作りには、これが大切だ。

信頼関係のない間柄では、ことばが心に突き刺さる。心の中に、受容できる土壌ができていないからだ。一方、高まった集団の中では、大人も子どもも互いを尊重するから、ことばが大切にされる。

こうして見ると、やっぱり行き着くところは人間関係。そして、ことばは生きているということだろうか。